（別紙２）

審査の結果の要旨　氏名　天内　大樹

本論文は、1920年に結成され28年まで活動を続けた日本の建築運動団体である「分離派建築会」（以下「分離派」と記す）のメンバー（主に石本喜久治、堀口捨己、山田守、瀧澤真弓、森田慶一、岡村蚊象）の遺した論考に焦点を当てつつ、当時の建築界の理論的状況を明らかにする試みであり、大きく4つの章からなる。

第1章「『芸術』の確保――工学主義との対峙」は、「分離派」の結成を支えていた動機が、建築を従来のように単なる「工学」の対象と捉えるのではなく「芸術」として正当化しようとすることにあったことに着目し、主として堀口の論考を「分離派」が直接批判の矛先を向けた「構造派」の野田俊彦の論考との対比に即して検討するとともに、山田の設計した「東京中央電信局」をめぐる論争を分析する。著者は「分離派」の議論が白樺派の「人格主義」と親近性を持ち、さらに「大正生命主義」的特質を備えていることを明らかにする。

第2章「『芸術』の内容吟味――『日本』の『様式』」は、「分離派」とミュンヘン、ヴィーンのゼツェッシオン（分離派）との関係を軸としつつ、「分離派」が本来はある様式に限定されることのない芸術運動であるにもかかわらず、当時の建築界によって特定の様式（すなわち直線を好み、装飾的曲線を否定する様式）と誤解されたことを指摘する。とともに、堀口におけるオランダの田園都市体験、瀧澤における中世ゴシック発見、堀口・山田・瀧澤による青島（中国）のドイツ建築との出会いなどに即して、著者はモダニズムにもつながる「分離派」の様式的特質にも言及する。

第3章「『芸術』の霧消――“芸術外”との融合」は、森田のル・コルビュジエへの接近、瀧澤と「バラック装飾」を肯定する今和次郎との論争、「分離派」に属しつつ「創宇社」を創設した岡村によるプロレタリアニズムの導入を扱いつつ、「分離派」が解消していく過程を分析し、続く短い第4章「終章――分離派の終焉」は谷口吉郎による分離派批判（1928年）を手がかりに、すでに求心力を失っていた分離派の終焉を描き出す。

著者は膨大な一次資料を渉猟しつつそれに基づいて自らの議論を極めて実証的に構成し、そのことを通して従来の先入見を多くの点で訂正することに成功している。著者の禁欲的な態度は時として「分離派」の置かれていた社会的文脈を見にくくしているところもあるが、本論文は「分離派」に関する初めての本格的な総括的研究として、今後の「分離派」研究において常に参照されるべき位置を占めることは間違いない。よって、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに値すると判断する。